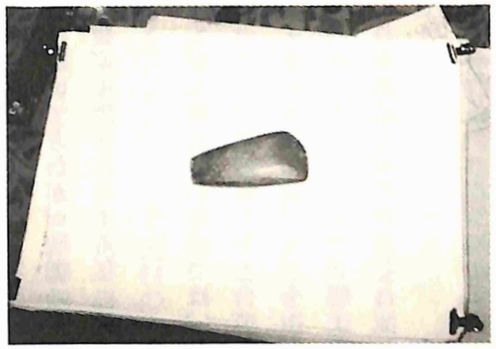
烈な戦いが起き敗北したアソベ族の一部は日本列島を南へと移住をする。しかし、東日流に生き残ったアソベ族とツボケ族との混血がすすむにつれて、彼ら混血族はすぐれた古代文化をうみだす。（カッコ内は佐藤有文著よりの一部）

○写真の石器は東舘コ跡の堀りと思える畑地より出土された石器である。平成十一年七月に西津軽郡舘岡の亀ケ岡考古資料室を訪れ陳列品の石斧と色あいは違うが型の類似に驚いた。

縄文期に嘉瀬畑中の東舘コで石斧が造作されていたろうか。それとも、一万年前に氷河期を脱して暖気候期と寒冷期を繰り返してきたといわれる。このことは花粉の化石を調べてわかったとされている。

東館出土の石器



暖気候往時は十三潟の入り江は嘉瀬地区及五所川原近辺までも湖水が満ち、西津軽郡亀ケ岡と嘉瀬の東西の舘コとは一直線であり、亀ケ岡の津保化族との舟の交通か、それとも、津保化族の移住によってこの地に遺物となって現れた石器であろうか。西一三四一年ー南北朝時代の日本海大津波による十三港の壊滅と西一六〇〇年ー慶長五年、及び西一六三八年ー寛永十五年等の岩木山噴火の（塵灰が降り夜のごとし）積灰と流れの土砂により十三潟の入江も現在の狭い湖になったといわれる。

嘉瀬放しと金木放し

古戦場であり小高い丘畑の北側にサンザム堰の流れのあと嘉瀬放しと、金木放しは、今も存在している。この流れこそ、東舘コ、西舘コの防禦の小田川本流であると先輩の須崎正敏氏が話ていた。

奴橋より三三九号線を北に進むと黒川給油所がある。その近くの排水溝には、区画前の反復用水（一度用いた水田の排水を再び使用する）堰止めと幅四メートル・長さ十メートル程の水路の跡と橋とが国道三三九号線西側にあるこの水路は嘉瀬ばなしと称していた。三三九号線より東に向うこと三〇〇メートル地点は幅は八メートル～十メートル程で二メートルは続いていた。この場所はよく子供の水遊びや魚釣りをしていた所である。

この流れこそ小田川本流であったとする村人もある。又上萩元地区の津軽鉄道休憩所傍に鉄道をくぐり抜けた水路がある。

そして現在の区画された排水溝に水が流れているこれが旧金木放しの始まりの地点である。金木放し水路も反復用水であったが嘉瀬放しより大分狭かった。この流れは秋元地区と菅原地区の境界線を流れ、嘉瀬と金木の境界とされていた。

金木放しとサザム堰よりの流れと嘉瀬放しの流れと三本の流れが下流では合流して十川に排水され岩木川に流れていた。

この金木放しの水路こそ嘉瀬と金木の間の川コとされる村人もある。昔は嘉瀬と金木は仲が悪く私の祖父は嘉瀬の消防組の一人として金木放し付近で金木消防組との喧嘩で、大いに暴れたと父から聞かされた。

川床の埋没根株

人類の発展は川の流域といわれ、世界古代の四大文明とされている。黄河文明の黄河。インダス文明のインダス川。メソポタミア文明のティグリス、ユーフラテス川。エジプト文明のナイル川。以上の四大文明国は西暦前三〇〇〇年頃に川の恵みの農業によって繁栄されていたといわれる。

古代の遺跡のあるティグリス・ユーフラテスの両川に日本探索隊が行き観察すると余りにも流域の変化に当惑されて一時、日本に帰り科学的に見当されてから再度遺跡の探索に当たった様子をテレビで放映されたことがあった。

小田川の川筋も信じがたい程変わったのだろうか。畑中の須崎正志・山中伊佐男の話しによると小田川改修工事も完成して各堰止めが撤去されると川床は急激に二メートルも低下して川岸の住家の井戸水が涸れ、五所川原土木事務所と交渉の結果、改修のためと認めて水道を通してくれたそうである。

須崎氏山中氏共に川岸に住家があるのでしばしば、奴橋より川床を覗くと、写真の大樹の根株と粘土の中に這った根の穴がくっきりと現れていたという。

小田川改修工事で出土した根株

くっきりと現れていた他の株はその後の工事でブルドーザーやユンボ等の機械のため破壊されて残ったのは写真の株が少々あるのみ。腐食がはなはだしく、何時まで保つだろうといわれている。

考古学の説によると約一万年前に氷河期を脱した地球は徐々に暖かさを増していきながらその間、何回か寒冷期を繰り返して約三千年前のちょうどこの時期日本列島に植生が温暖植物のミズナラ・から寒冷植物のトウヒ等に変わっていることを示しているといわれる。

小田川の埋没の根株は何千年の古代大樹なのだろうか考古学者に見定めしていただきたい場所でもある。

河川改修工事

敗戦二十年後の小田川・飯詰川・十川の部分改修は村にとっては良い賃金稼ぎ仕事であった。十川の改修は「内務省」担当・簡易軌道線を河川敷地に設置、七、八輛の連結されたトロッコを馬が土堤に引き登り崇盛りをしていた。

十川の現場事務所は戦時中から、内務省の旗及安全旗と共に毎日のように、はためいていた。

この事務所に通う所長らしき人物はみごとな八の字の張り上った口髭を生やし、真白い手袋を嵌めて嘉瀬の宿屋より三キロの道のりをピカピカの自転車に乗る姿は忽ち村の評判となる。

小田川、飯詰川は嘉瀬の内海清蔵・原田勇太・山中与七の建設業者が規模も大きく他村からの下請業者を入れて盛んに改修が工事がなされ、土方仕事は農閑期の村の若者達の賃金稼する場所であった。

初若者（学校卒業者）はスコップを使うと一日で手の中に水が溜まった豆ができ、豆が破れるとスコップの柄をにぎるだけで痛みが走る。スコップだけ用いての仕事をスコップ撥ねと称して溝を堀り、穴を堀り、三〜四メートルの高さの土堤にスコップで撥ね上げて嵩盛りすることもある。

土取り場の約百メートル前後も離れている時は簡易軌道線を敷き一台のトロッコを一人で使用する。前後のトロッコは先輩が押すことにする。一台でも多く運ぶためである。

近くに土取りのある時は土堤の頂上まで斜面路を造り、土が一杯盛られたモッコ担ぎをする。

約三メートルの長さに柄の太さは十五センチ程で先細りの棒をモッコに通して先棒を肩に担ぐ人、後棒を肩に担ぐ人とに分れ、百キロほど重みのモッコを担いで坂道を登り行く初若い衆には辛い仕事であった。

上半身裸の肩に担ぐ棒の食い込む痛さと重みに歯を噛み締めながら土堤の坂道を登り嵩盛をする。

二日、三日してモッコを担ぎ続けると肩は赤く腫れ上がり痛

みだしてくる。手拭いを折り重ね、肩にあてがっても腫れた皮は破れてくる。棒が肩に触れるだけで痛みが肩に刺さる。

こうなると左肩を使うことになる。左肩も又右肩同様に腫れては破れる。意地悪の先輩と相棒となると、モッコ担いでいるとき棒を回され肩より血が滲みでる。痛さと苦労に耐えられず、一週間ほどで脱落する者もでた。

一ヵ月、二ヵ月と続けるうちに肩に胼胝（タコ）ができ、やがて瘤となり、手のひらも胼胝（タコ）豆となる。一人前の土方衆は両肩を使えるようになり、スコップも左右どっちを向いても自由に使えること、土はんも上手に造れる、この条件を満たすと一人前の土方衆である。

スコップと棒は私物であり、新しいスコップは反りを直し、スコップの先端は刃物のように切れるように研ぎ澄まして置く。

土方専門とされた人はモッコ担ぎによるのか大相撲の元横綱隆の里及若の里の肩のように盛り上がった、土方衆の姿は村の銭湯（風呂屋）に行くと見られたが現在は派立ー鶴の湯広瀬氏・本町ー熱の湯鳴海氏・前町ー通称古町の湯鳴海氏と三軒の風呂屋も廃業となった。

右の土方衆も又故人となり、老いた俺達の心に偲ばれるだけとなった。

＝山中長三郎踏査記＝

①古文書控帳より

墓　石

嘉瀬ノ古イ墓石

(イ) 妙光庵ノ古イ墓石ヲ見ルニ、嘉永四七元年ノモノ天保四六十年ノモノアリ、最モ古キモノ寛政二戌年二月七日秋元幸一郎ノ墓石ナリ。

(ロ) 明誓庵ノ墓石ハ寛政三年、文政元年・四年、嘉永、文化等モアリ。嘉暦ノモノモアリ、此辺ニテハ最モ古イモノト思ハレル。

(ハ) 中柏木村ノ墓石ニテ古キモノハ、嘉永五子七月九日、天保八酉七月二日、文政子十月玉井林右エ門（江戸相撲ナリシト云フ）

(ニ) 小栗崎山ニテハ寛政五年（伊藤家ノモノ）

妙光庵御曼陀羅

当寺には当庵拾四世と書きたる御曼陀羅（地獄極楽を描きたる懸軸）二幅、拾四世と書きたるあれば、当寺は相当古き由緒ある庵と思はれる。

（山中正津氏遺稿より）

②歴史散策　金木散歩

金木用水水源は馬禿下にあった

『昭和十一年十一月発行かたりべ第十四号六十六頁＝岩木川水運や蒔田集落等について、の文中、六百年前に領主（対馬治右衛門）が開田したという八十町歩の美田は、今でも金木の内田といって不作知らずの水田である。

この水田を領地とともに藩政以前まで何百年も管理してきたのが治右衛門一族である。

ところでその領主は経済的にも力があったのか、金木川上流より水を引き　中世時代の町の真ん中に飲料水の小川を通している。その小川の流れ落ちる所に開田されたのが八十町歩の美田である＝白川兼五郎著＝』

街の真ん中に飲料水の小川を通して云々について、小川の所在確認は『かたりべ

第十四号所載、金木村志六頁、金木村略図』によって認められた。

金木川上流より水を引きと記されてあるところから、水取入口水門はいずこにあるのか。平成十四年五月十日津軽鉄道金木川鉄橋下から上流に向かって、取入口の水源を求めて踏査をこころみた。

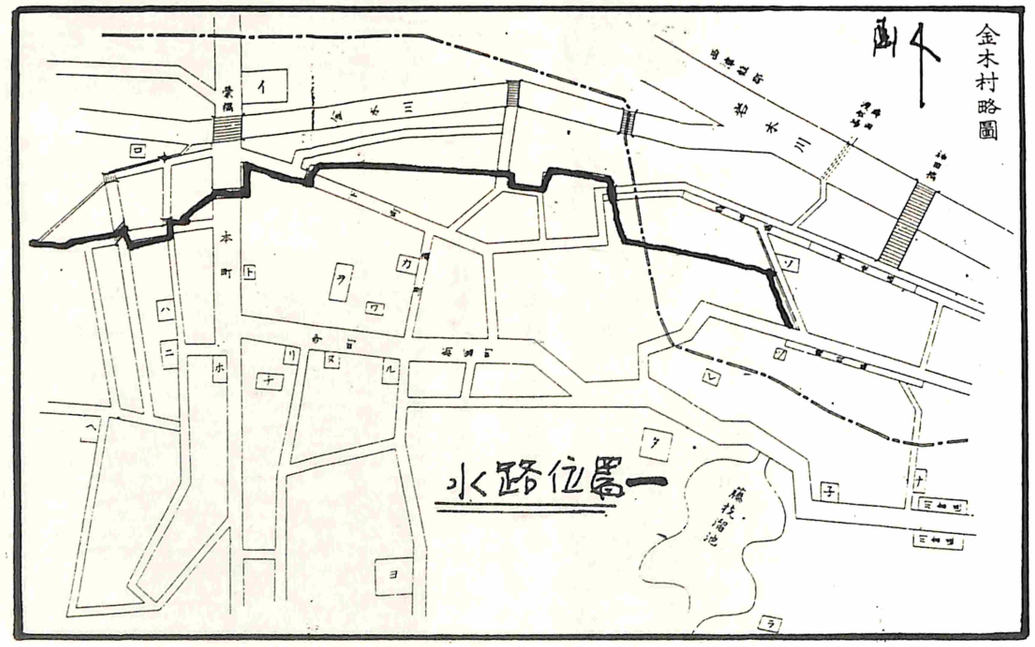
大東亜戦当時（第二次世界対戦）馬禿下に玉石を積み重ねた水留の水取入口があった筈で、下流右手は字坂本、左手は字千刈に落ちる水路の記憶をたどって、馬禿下に至ると、現在コンクリート堰堤で川を堰止め、取水されているのが確認できた。

水路をたどって下って来たが、金木農場下から、津軽鉄道線路下をくぐり、金木町内を走る水路は、各家庭から排出される汚水の排出水路に変って、国道三三九号線バイパス道の上手で金木川に放流され、往時八十町歩の美田には届いていない。小田川ダム完成に伴って、土地基盤整備が進み、本金木水路の水の必要がなくなったからである。

馬禿下からエンエン金木地域まで用水路を開鑿、美田を残した農民の遺産である金木用水は完全な姿を見ないが、現在も利用されていることが確認できた踏査であった。

（きのした清一記）

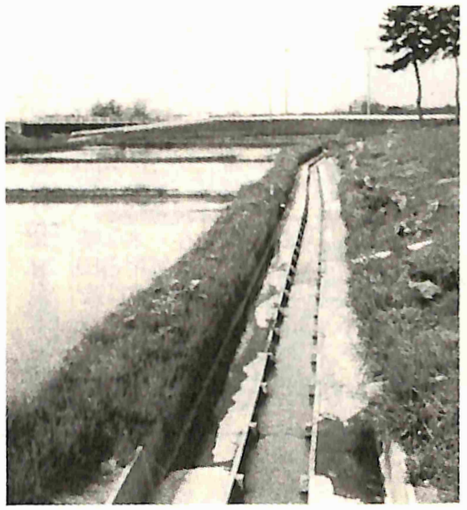
①馬禿下堰堤



②新水門取入口

⑤岩見町下喜良市道下をくぐる

③崖地切割水路



⑥金木農場下を流れる

④坂本道の下をくぐる

⑦排水金木川に放流される

金木の集落をさぐる

秋　元　惣之進

金木町には若干の各集落があるが、私は集落の往時の起源を知りたいと思い、古老達を尋ねて聞きに歩いたが、集落名の語源はただたんに名付けなれたもので無く、土地柄に結び付いた言語、民族、地理、土地の歴史や往時の人々の姿がその中に含まれて伝えられ、又、伝承されて来た集落の語源は旧街道、伝説、伝統、社寺に由来する多くのものは忘れ、その由来を知る「古老達も数少なく」、落葉同様に枯葉も遥か彼方に吹き飛ばされる如く忘れ去っている。

地中に埋もれた貝殻、土器同様に集落名は歴史を感じ郷愁を覚えるが形の無い文化財であると思うが、集落名の大半は「字義」の通りであると思うが、愚考も入れて金木町の集落史を探り綴ってみた。

筆者近影

金木の地名

四代藩主、信政は津軽平野に新田開発をと「肝」に銘じ、又、農民の貧困を軽減し領民の人心安定をと誓い、北限の茫々たる原野に開墾開田をと着々と基礎工事の構想を練り、それには岩木川の堤防、排水、溜池の築堤をと新田開発は大事業で遠大、且つ大規模な構想であったが、新田開発の一環としては藩費では到底、賄い切れず四苦八苦、苦慮したが藩では津軽半島の中山山脈の梵珠山の神が授けた原生林、神木山の森林（注　往昔には金木を神木と呼んだと言う説もある）桧葉を伐採し、他国に売り新田開発の財源捻出にと考慮、即決、各地から人寄せを

し、特に金木組（拾八ヶ村）からは杣夫やその他の人夫を雇い入れて人夫小屋を建て寝泊りして桧葉を伐採し、梵珠山から萩元川へ流れる川を中途で水門状態に木柵で止め、川の水を満水に溜め桧葉材を水門まで流し込み、堰止めた川の一ヶ所に数百石の桧葉材を集結して一度に放流、水力の勢いで桧葉材を萩元川の河口まで流し込み、河口には材木奉行の番所が有り役人達は厳重な検査の上、岩木川から十三潟に材木の集散地を設け、十三潟で筏を組み海上運行、幕府には津軽の良材、桧葉を献上し、又、江戸、京都、大阪、加賀、若狭などにも販路を拡大したが桧葉は各地から注文が殺到した。

四代藩主、信政は津軽新田開発の大きな財源の神木の桧葉材の売行きに満顔となり、神木の桧葉材は「金の木」だと褒め讃えたと言うが、誰れ言うとも無く神木を「金木」と呼ぶ様になり現在の金木の地名の由来が出来たと言う説もある。

いずれにしても津軽新田開発の大事業は金木山の原生林、神が授けた桧葉材が新田開発事業の財源の宝庫だったと言う。

萩元川は往時には川幅が広く深く急流だったが、岩木山の数回の大噴火と風化作用で現在は小さな川堰になった。又、嘉瀬と金木の間の川は往昔には萩元川だったと言う説もある。

嘉瀬の地名

約、六百十数年前の興国五年（一三四四＝六五六年前）に朝日左ェ門尉行安（藤原景房）が飯詰に高楯城を築城したが三年後の興国八年（一三四七＝六五九年前）に家臣の「嘉瀬光明宗範」に嘉瀬山にも（お城山）支城を築城するように命じた。

又、北畠顕村は北畠親房の子孫とも伝えられ、今から約、四二二年前の天授四四年（一三七八）に浪岡を拠点に附近一帯を支配していたが、天正六年七月（一五七八＝四百二二年）大浦（津軽）爲信に依って浪岡城が滅ぼされた。

飯詰城主、朝日左ェ門尉行安は、大浦爲信に抵抗すること十数年、最後で抗戦し敗退させた。

飯詰城主は爲信軍の再度の攻撃を予知し、嘉瀬城、小田川城、金木城主、津島右ェ門太郎義栄等に「加勢」を依頼してあるも金木城主、津島右ェ門太郎義栄は大浦（津軽）爲信に『寝返り』して高楯城主、朝日左ェ門尉行安を裏切った。

金木城主、津島右ェ門太郎義栄は大浦爲信の助勢を得て五百余名の軍勢で嘉瀬城を攻撃、金木軍勢五百余名、多勢に無勢なるも嘉瀬城は城こそ「小なりと言えども嘉瀬城主、嘉瀬光明宗範寄略縦横の知将」なりと金木軍勢を敗退させたが、五年後の天正十五年五月（一六十五年＝三八五年前）大浦爲信軍勢、新

城軍勢、阿部孫三郎、金木軍勢、津島右ェ門太郎義栄等「嘉瀬城を北西と背後」から総攻撃を開始、嘉瀬城は十重二十重に囲まれ多勢に無勢奪戦虚しく、遂に天正十五年五月二一日（一五八七＝四一三年前）嘉瀬西舘、東舘、小田川城が炎上「嘉瀬城も哀れ落城し嘉瀬領民の大半は嘉瀬城と共に枕をならべて討死にしたと伝えられる。

又、嘉瀬光明宗範は落城寸前に妻子を黒石方面の山奥の隠里に預け、宗範は再起を願い数名の従者と共に越後（新潟）方面に落ち延びたとも伝えられる。

又、黒石市や青森市にも「嘉瀬と言う苗字があり」又、新潟県内にも嘉瀬と言う小さな集落があるという。（木立民五郎氏談＝故人＝元嘉瀬村長）黒石市や青森市にも嘉瀬と言う「苗字」や新潟県内の嘉瀬と言う小さな集落は「嘉瀬光明宗範の子孫ではないか」と憶測し「嘉瀬の集落」は嘉瀬光明宗範の「苗字」を取り「嘉瀬」と「地名」を命名したのではないかと愚考する。

中柏木考

藩政時代の中柏木は大字中柏木ではなく独立した中柏木であった。伝承に依ると嘉瀬本村より早く開村された村とされ中世鎌倉時代には、中山山脈山根伝いの行立（浪岡）から十三港に通じる下の切道中山道の要衝の村であり、集落の北はずれの小高い峯は安東一族支配、中柏木城（舘跡）があって相内福島城の一つであったと記録が残っている所から現在の嘉瀬本村よりはるかに古く、遠くは安東氏治領時代はるか彼方の蝦夷時代にさかのぼるのであろうと、中柏木集落民は誇りをもっていると思う。津軽爲信が津軽を統一した以前の地域の拠点は、藤崎、浪岡、飯詰、相内、十三であった。藤崎、十三を結ぶ線は岩木川の水路であり、石川、浪岡、飯詰、相内を結ぶ線が山根通りの陸路であり、中柏木の山根通りは江戸時代の初め頃、津軽本道の中央路に位置しているからである。

安東一族の支城の一つ、中柏木城も応永二六年（一四一九）南部の攻撃に会い廃城となり、中柏木城を守った村民も北海道、秋田に散って行き、わずかな生きのこりが中柏木村を再興したであろうことは論をまたない戦国葛藤時代の定めである。

中柏木は村独自の記録、旧家の古文書保存が無にひとしく、大正時代の村社の焼失、旧家、原田家の焼失によって貴重な資料が失われている。それ故に伝承と津軽正史により中柏木をたどって見る。

記録によると天正十八年（一五九十年）前田利家一行が津軽に来りて、九月上旬に津軽を検知、中柏木村、石高、四石一斗二升と検知、早くから農耕に従事していた村民が生活を営んでいたことは当然であるが、中柏木は生活基盤の弱い立地条件であったと思う。

つまり泥水による掛水は冷水のため低収益の稲作、又、痩地